

注文の多い料理店 - ほんとうは、こうだった！

みなさんは、宮沢賢治さんの書いた「注文の多い料理店」のお話をご存知でしょうか。実は、わたしこそは、その料理店に行った正真正銘の本人なのです。しかし、実際に起ったことは、賢治さんの書かれたものとは、すこし違っていましたので、今日は、そのお話をしましょう。

わたしと友達は、犬を連れて山奥深く、狩に出かけました。ところが、その山は、妖気に包まれ、わたしたちの連れていた犬は、泡を吐いて死んでしまいました。道に迷ったわれわれは、一軒の洋館を見つけました。玄関には、

西洋料理店 山猫軒

と書いてありました。おなかの空いたわたしたちが、中にはいると、「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」と書いてありました。注文客が多く繁盛していると勝手に思い込んで、ずんずんと中に進んでいくと、部屋ごとに「髪をきちんとして、はきものの泥を落してください。」「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」などと書いてあるのです。最後に、「からだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください。」と書いてあるのを見たとき、この店は注文客の多い店ではなく、客にたいする注文が多い店で、客に料理を食べさせるのではなく、客が料理されて食べられるのだと、やっと気づいたのでした。

奥の方には、さらに一枚の扉があって、その鍵穴から、二つの青い眼玉がこつちをのぞいています。わたしたちは、思わず、

「たすけてくれ。食べられたくないよう!」

と叫びました。賢治さんのお話ですと、死んだはずの犬が駆けつけて、わたしたちを助けてくれたことになっています。ビデオゲームじゃあるまいし、そんな都合の良いことは起きやしません。青い眼玉は、したなめずりをしながら、こう言いました。

「さあ、どうやって食ってやろうかな。そうだ、もし、おまえたちがほんとうのことを言ったなら焼いて食ってやろう。ウソをついたら煮て食ってやる。」

わたしは、とっさの機転をきかせて、この絶体絶命のピンチを逃れることができたのです！

問題 さて、わたしは、何と言ったのでしょうか。